



吹田市

文化財ニュース

No. 18

平成9年3月31日

〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

吹田市立博物館

TEL (06)338-5500

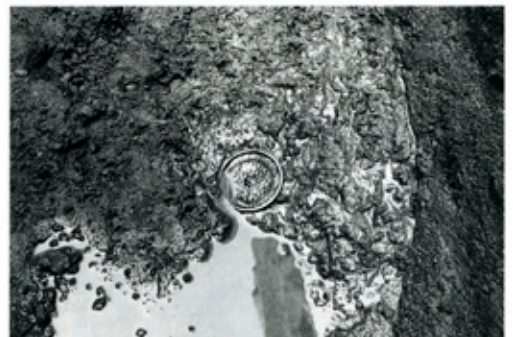
FAX (06)338-9886

蔵人遺跡から和鏡出土！



▲出土した和鏡（菊花双雀鏡）

平成8年3月に行われました蔵人遺跡^{くらうどいせき}の発掘調査で、中世の溝から和鏡^{わきよう}の完形品が出土しました。この鏡は直径7.2cmの円形の銅鏡で、ほとんど錆^{さび}が認められない、極めて遺存状態が良好な資料です。鏡背面の文様は、一条の圏線^{きんせん}で区画された外側に菊花が巡り、内側に菊花と、嘴が接するように向かい合う2羽の雀^{すずめ}があります。一般に菊花双雀鏡^{きくかそうじゃくきよう}と呼ばれるもので、鎌倉時代のもと考えられます。蔵人遺跡の中世の遺構から鏡が出土したのは今回が初めてであり、中世の集落の実態を解明する上で貴重な成果となりました。



▲和鏡出土状況

平成8年度の文化財関係事業

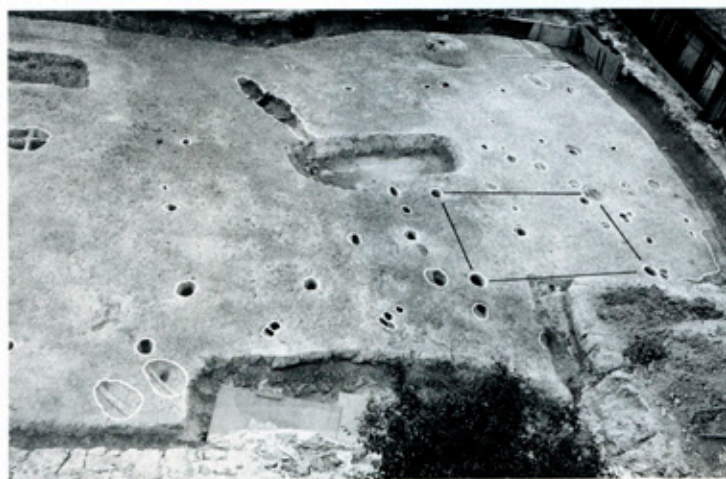
平成8年度は、^{くろうどいせき}蔵人遺跡で5件、^{たるみいせき}垂水遺跡、^{たるみなみいせき}垂水南遺跡、^{かたやましばたいいせき}片山芝田遺跡、^{たかばたけいせき}高畑遺跡の4遺跡で各1件の本調査を実施しました。

蔵人遺跡と垂水遺跡では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を、垂水南遺跡では古墳時代の遺構・遺物を検出することができました。垂水南遺跡の調査では、^{かっせきせい}滑石製の^{まがたま}勾玉や作りかけの石製品が多数出土しました。垂水南遺跡では、昭和56年度と昭和58年度の発掘調査におきましても、^{うすだま}勾玉や白玉などとともに未成の石製品が大量に出土しており、遺跡内に石製品の製作工房があったと考えられています。今回の調査成果もそれを裏付けるものといえます。

片山芝田遺跡と高畑遺跡は平成8年度に新し

く発見された遺跡です。片山芝田遺跡では、縄文時代から中世にかけての出土遺物がありましたが、中心となる時期は平安時代で、この時代の遺物とともに、^{はったてばしらたてもものあと}掘立柱建物跡や^{きくれつ}柵列などの遺構を検出しました。また、高畑遺跡においても平安時代の掘立柱建物跡を検出しました。

平成8年度は、埋蔵文化財の発掘調査のほか、^{ろくじせう}文化的遺産の保存事業として、^と六地藏、^{ろす}都呂須、^{かねでんちぎ}金田町、^{かわずらちやう}川面町の各自治会の^{だんじり}地車の保存修理等に対して補助金を交付しました。また、平成7年度に引き続き^{やまだごんろく}山田権六おどり、^{いずどのぐう}泉殿宮^{かぐらじし}神楽獅子、^{やまだいぎなぎじんじやたいこみこし}山田伊射奈岐神社太鼓神輿の無形民俗文化財に対して奨励金を交付しました。



◀ 片山芝田遺跡遺構検出状況

▶ 垂水南遺跡第53次調査土器群検出状況



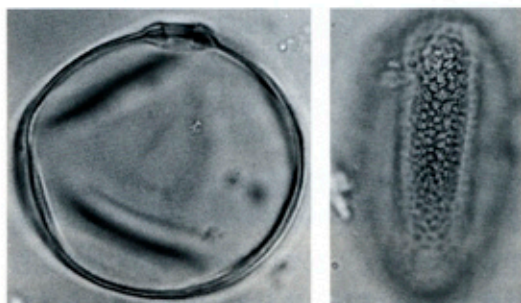
目俵遺跡採取資料の特殊分析

平成6～7年度に実施した（仮称）^{めだわら}目俵市民体育館建設に伴う発掘調査では、主に弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出しました。この調査では人為的な遺物の他に、遺跡内の土や火山灰などを採取し、それを専門会社に委託し、自然科学的手法を用いて分析を行いました。ここでその結果を簡単に紹介します。

分析は3項目について行いました。1つは遺跡の土の中に含まれる植物の花粉化石を分析し、昔の植生の復元を行おうというもの。1つは、遺跡内で採取した火山灰の分析で、この火山灰が、何時、どの火山から噴出されたものかを知ろうというもの。そして、もう1つは、遺構から出土した木質遺物をC14年代測定法という手法を用いて、木質遺物の実年代を知ろうというものです。

まず、花粉分析についてですが、この分析では、弥生時代の遺物を含む土と中世の遺物を含む土を試料として、その中にある花粉化石を分析しました。その結果、それぞれの土の中からは様々な花粉化石が抽出されました。そのうち、中世の土からはイネ科の花粉が多く確認され、今回の発掘調査において中世の遺構面で耕作地の痕跡が検出されていることを踏まえると、この時期の目俵遺跡では水田が広がっていたと想定されます。また、ソバの花粉も抽出されており、ソバも栽培されていたことがわかりました。

次に、火山灰分析についてみますと、採取した火山灰は、調査区南側で検出した落ち込み内に約10cmの厚さで堆積していたものです。分析の結果、約6300年前（縄文時代前期）に、現在



▲花粉化石の顕微鏡写真
（左：イネ科、右：ソバの花粉化石）

の九州の南海上約50kmの地点にある鬼界カルデラから噴出し、風によって広い地域に降灰した鬼界アカホヤ火山灰であろうということがわかりました。このことから、この落ち込みが縄文時代前期には、おそらくは湿地として存在していたことがわかりました。

最後に、年代測定についてですが、C14年代測定法とは、動植物を元とする有機質の遺物に取り込まれている放射性炭素C14の濃度を計測することによって、実年代を知ろうというもの。今回は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構面上で検出したピット内から出土した木質遺物を試料として分析しました。その結果、その年代は紀元前300年±80年となり、縄文時代晩期末から弥生時代前期初めに当たることがわかりました。このことから、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと考えていた遺構の中には、より古い時期のものもあるという可能性を考慮しなければならない必要が生じてきました。



▲火山灰の堆積状況
（白い層が火山灰）



▶火山灰の顕微鏡写真

蔵人遺跡第10次調査の概要

蔵人遺跡は、吹田市豊津町から江坂町2、3丁目に広がる、弥生時代から中世にかけての遺跡です。現在までの発掘調査では、主に中世の遺構・遺物を確認しており、これらの多くは、15世紀の史料（春日社領榎坂郷名主百姓等申状案・1403年）にその名が初出する蔵人村に関連するものと考えられています。今回の調査地点は蔵人遺跡の北端に当たり、調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、9面の遺構面が確認されました。以下、この発掘調査の概要を紹介します。なお、文中で遺構面を第1面、第2面…などと表記しますが、番号が小さいものほど時代の新しい遺構面となります。

まず、中世の遺構・遺物についてみると、中世期に相当すると思われる遺構面は、計4面認められました。これらの遺構面では、溝やピット（小穴）、土坑、自然流路などが検出されました。そのうち、第1面と第4面において、南北方向にのびる数条の溝が検出されました。これらの溝はほぼ同一方向にのびており、その方位は、ちょうど蔵人遺跡が位置しているかつての豊嶋郡にみられる条里制区画の方位とほぼ一致するものでした。おそらく、これらの溝は耕作に関わるものであると思われます。この他、第2面においては、その性格は明確ではありませんが、直径約5mの大型の土坑が検出され、



▲第2面検出大型土坑



◀曲物出土状況（大型土坑内）



▶羽釜出土状況（第3面）



▲第4面遺構検出状況

その深さは約2mを測りました。この土坑内からは、鎌倉時代の瓦器や土師器などの日常雑器や、曲物や竹製の編物などの木製品が出土しました。また、第3面では、ほぼ完形となる瓦質の羽釜が土坑の中に埋められた状態で検出されました。この他に興味深い遺物としては、第4面で石製の硯の破片が出土しました。

今回の調査で検出された中世の遺構の性格については、その多くが耕作に関わりをもつものと考えられますが、礎石をもつ柱穴も検出されており、今

回の調査では確認されませんでした。当地に住居などの建物が存在した可能性も考えられます。

さて、次に古墳時代の遺構・遺物についてみてみます。古墳時代の遺構面は計3面検出されました。第7面では、主に土坑やピットが検出され、このうち、4基の土坑内から大量の土器片がまとまって出土しました。これらの土器群は土坑内に捨てられたのか、意図的に埋められたのかは明確ではありませんが、ある一つの土坑内においては、そのほとんどが土師器高杯の破片で占められており、これらの土器群の形成に何らかの意図が働いた可能性はあります。また、第7面の遺物包含層中からは、勾玉が1点出土しています。

第8面と第9面では、溝や土坑が検出されましたが、第8面で検出された一部の溝については、第9面で検出した溝（自然流路）が埋まっていく過程でのものでした。そして、第9面で検出した溝の中からは、残存状態のたいへん良好な遺物が多数出土しました。出土遺物の時期は主に古墳時代前期に相当しますが、この時期



▲第9面遺構検出状況



▲第7面土器群出土状況

の土師器の特徴である甕、小型丸底壺、器台の3器種がそろって良好な状態で出土しました。

この他、遺構面は検出されませんでした。弥生時代の遺物も多く出土しました。出土遺物には完形のもので甕や壺、鉢などがありますが、それらは弥生時代後期のものでした。今回の発掘調査では、第9面より下の層については調査を行わなかったのですが、さらに、第9面より下において弥生時代の遺構面が存在する可能性も考えられます。

以上のように、今回の発掘調査では9面にもなる遺構面が検出されました。これは、当地が幾度にもおよぶ洪水にみまわれたことが原因であると思われます。現在、調査地の西約300mには高川が流れています。現在の高川は護岸工事がなされ天井川として流れていますが、かつて昔の川は護岸されている箇所は少なく、大雨の度に氾濫を繰り返し、その流路を度々変えていました。おそらく、今回の調査地も度重なる高川などの氾濫を受け、その度に土砂が堆積し、その後にもまた人々が生活を始めるということを繰り返し、9面にも及ぶ遺構面を形成したものと考えられます。



▲土師器壺出土状況(第9面)

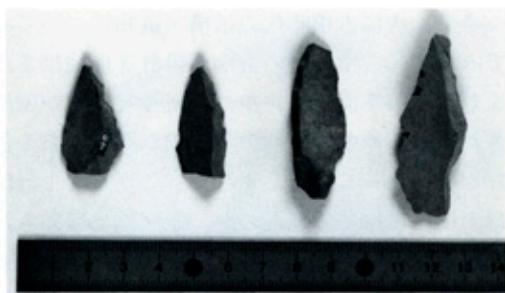
吹田市内の旧石器資料

吹田市におきましては、旧石器時代の遺跡として、従来、吉志部遺跡と垂水遺跡が知られています。これらの遺跡は両者とも千里丘陵上の標高20～50mの地点に位置しています。しかし、最近の発掘調査では、これ以外の遺跡からも旧石器が確認されています。特に、標高4～5mの平野部において、旧石器が出土しています。

高城遺跡と目依遺跡は、吹田市南半の平野部に位置しています。高城遺跡では、平成5年度の発掘調査でナイフ形石器を1点を検出しています。また、目依遺跡では、平成6～7年度の発掘調査において、ナイフ形石器3点と翼状剥片とよばれる石器1点を検出しました。

吹田市の平野部は、縄文時代以降、主に現在の神崎川や淀川などによって運ばれた土砂が堆積して形成されたもので、旧石器時代の地形は土中深くに埋もれています。ところが、高城遺跡と目依遺跡については、この旧石器時代の地形が比較的浅くからみられ、このことが、旧石器の検出に至ったものと思われます。

さて、この他に吉志部瓦窯工房跡においても旧石器が検出されています。この遺跡は、8世紀末の平安宮造営の折に、その瓦を製作した工房の跡で、吉志部遺跡の北東約300mの丘陵上に位置します。ここからは、国府型ナイフ形石



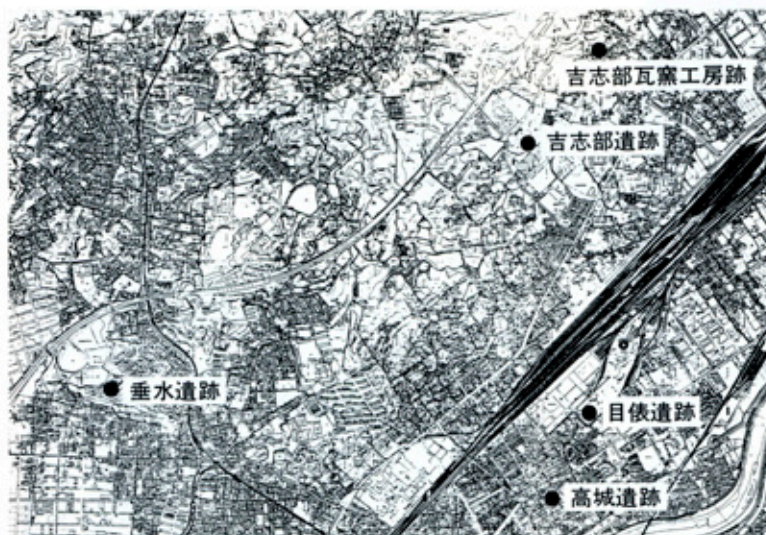
▲左1点は高城遺跡、右3点は目依遺跡出土、右端は翼状剥片、他はナイフ形石器



▲礫群検出状況(吉志部瓦窯工房跡)

器とよばれるものをはじめとして旧石器と思われる石器が数点出土しています。また、平成7年度の調査では、工房跡の遺構面より下層において、焼けた痕跡をもつ石がま

とまって検出されました。これは礫群とよばれるもので、おそらく旧石器時代の遺構であると思われます。礫群は吉志部遺跡においても検出されており、今回は吹田市で2例目となります。



▲吹田市内の旧石器出土の遺跡

出土した遺物の保存

市内では、毎年たくさんの遺跡の発掘調査が行われていますが、その発掘調査では多量の土器等の遺物が出土しています。土器以外では木器、漆器、鉄製品も発見され、当時の生活を知る上で非常に興味深い資料です。しかし、長く土の中に埋もれていたため、発見された時には鉄製品は錆の塊となっており、木器・漆器も非常に脆くなっています。これらの貴重な遺物は、そのままほっておくと状況がどんどん悪化して

いくために薬品等を使用して、保護する手立て（保存処理）をとらなければなりません。この保存処理にあたっては、鉄製品や木器等の材質や状況によっても処理方法が異なり、1点1点に最適な方法を考えていかなければなりません。そのため保存処理にあたっては、高い技術を持つ専門の機関に委託して保存処理を行い、完了したのについては博物館等で皆さんに見ていただけるようにしています。

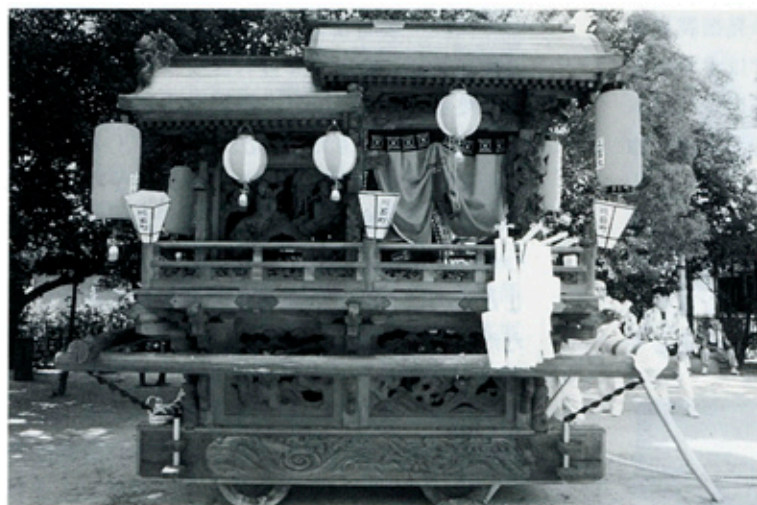


◀五反島遺跡で出土した平安時代の馬具（銜・あぶみ）。表面は錆でおおわれていました。



▶保存処理を行って博物館で展示しています。表面には黒漆が塗られており、細かい部分の構造までわかるようになりました。

川面町の地車



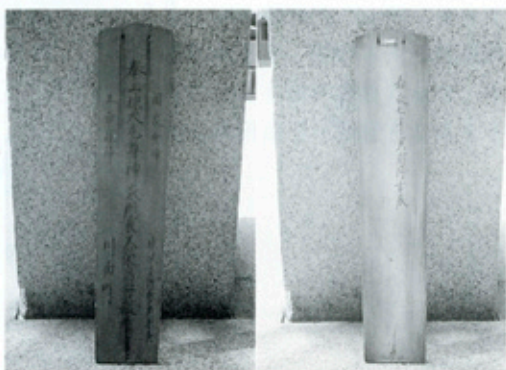
◀地車右側面

▶吹田まつりでの曳行



吹田市には、江戸時代後期に製作された^{だんじり}地車が多く残っており、今でも吹田まつりで曳かれています。川面町の^{かわづらちょう}地車も嘉永7年(1854年)に並河長兵衛兼広という大工によって作られたことが確認されています。

川面町の地車は、昭和26年5月3日の^{えいこう}曳行を最後に、泉殿宮内の地車庫に収められました。この間、地車は虫害などにより様々な箇所が損朽してしまいましたが、平成7～8年度にその修理が行われ、平成8年7月28日の吹田まつりで45年ぶりに曳行されました。



▲棟札(左：表面、右：裏面)